（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　三ツ松誠

本論文は、明治維新における国学・国学者の運動の検討を通して、その思想史的な内容と背景を論ずるものである。ここでは、本居派と平田派のそれぞれについて、各地で活動した国学者を素材に取り上げ、かれらの著述類を博捜し、テクストのていねいな解読を通じて、当該のテーマに迫ろうと試みる。

まず「序」において、明治維新と国学の「復古の思想」をめぐる研究史を整理しながら、論点の摘出と課題の設定を行い、問題の所在をを示す。本論は３部 10 章と、近代への展望を記す終章によって構成される。

第Ⅰ部「身分制社会における国学」では、国学者の社会的位置が思想の営為とどのような関係にあるかを 4 章にわたって検討する。1 章では一箇の「周縁的知識人」としての平田篤胤をとりあげ、『霊能真柱』の検討を通じてその実像をみる。2 章では、諏訪の平田派門人松沢義章における地域主義的復古意識の特質を考察する。つづく 3 章では紀州の平田派門人参沢明を事例とし、幽界との交渉をめぐる言説を分析し、またその活動から紀州国学の構造的特質を検討する。一方 4 章では、後期鈴屋門の担い手である本居内遠における国学教育機関としての学校構想を分析して、身分制の下における国学者の社会的公認要求の性格を考察する。

続く第Ⅱ部「幕末国学の転回」は、Ⅰ部を前提に、幕末期における国学の展開動向を追う。まず 5 章では、嘉永年間における気吹舎をとりあげ、その経営の担い手であった平田銕胤と参沢明との、『幽界物語』をめぐる交渉を解明し、幕末期政治情勢との関わりに注目する。6 章は『幽界物語』が各地の平田門人にどのような反応を引き起こしたかを辿る。また 7 章では三輪田元綱の足跡を再構成し、平田派国学と政治運動との関連に言及する。そして 8 章で国学者の「みよさし」論が、本来は将軍権力を正統化するものだったが、これが王政復古論を正統化するにいたった経緯に注目する。

第Ⅲ部「王政復古と国学者」では、明治維新以後の国学の動向を、スピリチュアルなものの挫折と、一方で国民国家の一翼を担う近代国学へとつながる系譜を、その担い手たちを取り上げつつ辿る。まず 9 章では、維新政権によって排除される直前の平田門人の状況を、矢野玄道・角田忠行・三輪田元綱などを例として垣間見、ついで 10 章では鳥取出身の本居派国学者飯田年平の思想と国家祭祀へ関与するにいたる動向をみる。

最後の終章では、維新後の三輪田元綱の足跡を追いながら、篤胤以来の平田派国学における神霊実在論の帰結と、近代国家において「異端」と化してゆくその後を見通す。

本論文は、各章で取り上げた国学者について、これまであまり注目されてこなかった者を含めて、その著述を可能な限り博捜し、テクストの考証・分析を通して、思想の特質や社会的な位置を検討した基礎研究として貴重な貢献となっている。論文の文体や叙述スタイルに改善すべき点が少なからず残るが、全体としては史料の読解も的確であり、基礎研究として有意義であると評価できる。本審査委員会は、上記のような成果に鑑みて、本論文が博士（文学）の学位授与に値するものであるとの結論を得た。